

横浜

Yokohama Renaissance

ルネサンス

Number 22

特集

横浜美術館を支える人々

Who's Who in YOKOHAMA

森村泰昌さん

大久保文香さん

らんま先生

A Table of Contents

目次／理事長ごあいさつ 2

特集 横浜美術館を支える人々

木村絵理子 学芸グループ主任学芸員／ヨコハマトリアンナーレ 2014 キュレーター 4

コレクションや企画展にも、横浜の歴史や地域性を反映

八柳サ工 学芸グループ主任学芸員、美術情報センターチームリーダー 6

展覧会で見た作品の理解を美術情報センターで深める

桜庭瑠実 教育普及グループエデュケーター 8

「市民のアトリエ」で、利用者の創作活動を支える

山崎優 主席ワークショップ・コーディネーター（子どものアトリエ担当） 10

主体性や自発性を重視する「子どものアトリエ」の活動

坂本恭子 学芸員／教育普及担当 12

来館者以外も対象にした、ユニークな教育普及活動

横浜を詠む 水原紫苑 写真：矢部志保 14

Who's Who in YOKOHAMA

森村泰昌 美術家、ヨコハマトリアンナーレ 2014 アーティスティック・ディレクター 16

ヨコハマトリアンナーレで大切な忘れものを問い合わせる

大久保文香 プロデューサー 18

大道芸を知って気づいた、プロデュースする面白さ

らんま先生 eco 実験パフォーマー 20

環境問題と実験ショー、そして大道芸の三位一体

横浜の聴き方 第14回 中島久 22
「ピューティフル・ヨコハマ」・「真夜中のエンジェルベイビー」（平山三紀）

横浜ジェリービーンズ俱楽部通信 23

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長

斎藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第22号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行とされています。

本号では、特集「横浜美術館を支える人々」と題して、さまざまな視点から横浜美術館という舞台で活動をする方々を取りました。

Who's Who in YOKOHAMAでは、美術家でヨコハマトリアンナーレ2014のアーティスティック・ディレクターである森村泰昌さん、大道芸プロデューサーの大久保文香さん、eco実験パフォーマーのらんま先生をご紹介しています。ヨコハマトリアンナーレ2014については、裏表紙もご参照下さい。

第14回「横浜の聴き方」では、平山三紀『ピューティフル・ヨコハマ』『真夜中のエンジェルベイビー』を取り上げました。

『横浜ルネサンス』第22号、お楽しみいただければ幸いです。

横浜美術館
TEL 045-221-0012 FAX 045-221-0300
開館時間 10時～18時 休館日 木曜日、年末年始
神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1

横浜美術館は、1989（平成元）年3月に横浜博覧会のパビリオンとして開館、博覧会終了後の同年11月に正式開館した。幕末以降の横浜ゆかりの作品群やセザンヌ、マグリットなど19世紀後半から、現代にかけての国内外の作品を広く収蔵している。また、横浜が日本の写真招来の地にあげられることから写真部門を設けており、写真の収集・展示にも力を入れているほか、「見る、つくる、まなぶ」を三本の柱とする複合美術施設だ。

初代の横浜美術館長は河北倫明。彼はこれから横浜美術館は、美術の専門機関から脱して、一般市民に親しまれ、役立つものでなければならないとした。その精神は、開館から25年経った今にも引き継がれている。

トリアンナーレを目前にした横浜美術館を支える人々の活動を検証してみた。

特集 横浜美術館を支える人々



学芸グループ主任学芸員 ヨコハマトリエンナーレ2014キュレーター

木村絵理子さん

特集 横浜美術館を
支える人々

きむら えりこ 2000年より横浜美術館学芸員。現代美術の展覧会を中心に企画し、近年携わった展覧会に「Welcome to the Japonese」熱々!東南アジアの現代美術」展(2013年)、「奈良美智・君や僕にちよと似ている」展(2011年)、「高橋格・とおくてよくみえない」展(2011年)などがある。



コレクションや企画展にも、横浜の歴史や地域性を反映

収蔵作品に写真が充実している理由とは?

横浜美術館の開館は1989(平成元)年で、今年は開館25周年にあたる。収蔵作品は、19世紀後半から現代に至るヨーロッパと日本の絵画や版画、彫刻などが豊富に揃う。主任学芸員の木村絵理子さんは、その特徴についてこう語る。

「ご存じのとおり横浜は開港以来約150年の歴史があり、西洋と日本の文化の交差点の役割を担ってきました。収蔵作品には、こうした歴史や地域性が反映されています」

また、写真作品のコレクションが充実しているのも特色のひとつだ。だが、今までこそ美術館で写真が展示される機会は珍しくないが、開館当時は違った。

「写真を収集する美術館は少なく、『写真って美術なの?』という鑑賞者も多かつたと聞きます。でも、横浜は写真招来の地のひとつと言われ、写真館が開業したのも早かった。ですから、写真を重視しているのも、横浜の歴史や地域性を踏まえた上での方針なんですね」

また、横浜の土地柄は入館者層にも影響が及んでいると木村さんは言う。「当館は立地の良さに恵まれているおかげで、とくに休日は観光客が多くいらっしゃる」という。

しゃいます。地元のリピーターも多くいますが、初めて来館される方が一定数を占めるんですよ」

翻訳者のように作品を鑑賞者に伝える

「常に出品アーティストのことをご存じない来館者を想定しながら展覧会をつくります。展示を見ていくうちに、どういう人なのかをわかつてもらえるような工夫を考えています」

木村さんが手がける展覧会は現代美術が中心だ。最近では、奈良美智や東京、高嶺格各氏といった、目下第一線で活躍中のアーティストの個展を担当した。

「どういうアーティストを鑑賞者に紹介するのがいいのか、選ぶ際にはいつも緊張しますね。なぜその人を選んだのか、横浜美術館で開催する意義は何か、理由を説明する責任がありますから。それに、展示します。また、参加アーティストには物故作家も多く含まれているのが、今回特徴のひとつです。『現代』というのを『現在』と単純に言い換えるのではなく、長い美術の歴史の中で、いまの表現がどういう意味を持つのかを探ります」

1960~70年代について再考する作品を予測しながらの仕事です」

準備段階では、アーティストと話し合を重ね、テーマを提案して新しく作品を制作してもらうケースも多い。

なる展覧会を目指しています」▼

学芸グループ主任 学芸員、美術情報センター チームリーダー

八柳サエコさん

特集 横浜美術館を
支える人々

やつやなぎ さえ 横浜美術館開設準備室の1988年より学芸員を務める。現在は「美術情報センター」のチーフリーダーを兼務。近代日本画を中心とした企画展に携わる。近年の展覧会に「松井冬子展—世界中の子と友達になれる—」(2011-12年)、「横山大観展—良き師、良き友」(2013年)などがある。単著に「鍋木清方と金沢八景(有隣堂)2001年)。



美術情報センターで見た作品の理解を深める

多くのリピーターがリラックスして利用

展覧会を見ることは、横浜美術館の楽しみ方のたったひとつに過ぎない。というのも、同館は開館当初から「みる」「つく」「まなぶ」の三要素の連携を実践してきたからである。そのうちの「まなぶ」で重要な役割を担うのが、館内にある美術情報センターだ。美術についての書籍や映像などを所蔵し、広く利用者に提供している。国内外の図書や展覧会のカタログは10万冊を超えるほどで、美術雑誌は2600タイトルにものぼる。また、映像資料も約6000タイトルを備え、ビデオブースで鑑賞できる。

「これだけの広さの閲覧室のある美術館はそうそうありません」

同センターでチームリーダーを務める八柳サエコさんは、そのように胸を張る。

「美術情報センターと言うと入りづらい印象を抱くかもしれません、早い話、図書室だと思っていただければ。たとえば、『展覧会で見て気に入った作家の画集を見てみたい』という時に重宝します。展示の発見をいちだんと膨らませられるよう、積極的にご活用ください。地元のリピーターの方も多く、リラックスして本を眺めていらっしゃいますよ」

蔵書には美術資料の価値があるものも

蔵書にも特色があり、その一例が「中村文庫」だ。明治から平成にかけての美術の教科書や美術教育に関する書籍のコレクションで、まさに美術を「まなぶ」施設にふさわしい。また、蔵書検索は、同館のみならず、東京国立近代美術館や神奈川県立近代美術館など国公立の美術館9館の所蔵書籍を横断的に検索するシステムを導入している。

「そのシステム、実は横浜美術館が主導して立ち上げたんですよ」

さらに、企画展やコレクション展のたびに、関連した資料を集めたコーナーを設置。展覧会が何倍も楽しめる仕掛けを用意している。

「一般的の図書館では、定期刊行物はよく合本(複数の本を1冊にまとめる)になります。保存を考えると、そのほうが頑丈になりますから。でもここでは、展示会で展示ができるよう、あえて合本にしないものがあります。つまり、図書であり美術資料でもある蔵書なのです」

気軽に本が見られる

八柳さんは、横浜美術館が開館する準備段階から携わってきた生え抜きのスタッフ

である。

「当館に限らず、このところ、美術館は親しみやすい施設に変化してきました。美術情報センターも、多くの方々に知っています」

その取組みのひとつに、「探検ツアーア」がある。年に数回、施設のサービスと設備を司書が案内するツアーで、普段は利用者が入ることができない書庫にも足を踏み入れられる機会だ。また、貴重な書物や本の補修方法について紹介することもある。

「限られた機会になりますが、美術に関心がある人はもちろんのこと、本好きの方にも楽しんでもらえると思います」なお、美術館内の図書室の多くは、自由に読める本が少なく、申請して本を借りるケースが多い。

だがここでは、普通の図書館と同様に開架の書棚がすらりと並び、手に取つて選べる本も多い。

「気軽に本が見られるのも、ここ特徴のひとつです。広く開かれた図書室でありたいと思います。入館料を払わなくて美術に触れられますしね。これから美術情報センターの可能性や活用方法をもっと考えていただきたいですね」▼

特集 横浜美術館を支える人々
横浜美術館を
支える人々

さくらばるみ 2002年より横浜美術館に勤務。版画や写真を中心としたアート活動で多くの企画や制作指導を担当。また「アーティスト・イン・ヨコハマ」などの創造活動支援プログラムに携わる(2006-07年)。

桜庭瑠実さん

教育普及グループディレクター



「市民のアトリエ」で、利用者の創作活動を支える

平面と立体、版画の三つのアトリエ

前にも触れたとおり、横浜美術館は「みる」「つくる」「まなぶ」の連携が活動方針の大きな柱となっている。そのうち「つくる」の核のひとつが、「市民のアトリエ」だ。平面室と立体室、版画室の三つのアトリエがあり、絵画や陶芸、彫刻、版画などの制作が行える。版画室を担当する桜庭瑠実さんは言う。

「開館以来の常連さんから、版画をまったく経験したことのない人まで、利用者はさまざまですね」

天井高が5メートル以上もあるゆったりとした空間に、版画を制作するためのプレス機や道具が整然と並ぶ。この版画室では、銅版画やリトグラフ、シルクスクリーン、木版画など多様な手法の版画が制作できる。

初心者は、まずは「版画基礎コース（申し込み制、有料）」の受講が始ま

り、機材や道具の使い方をひととおり学ぶ。そしてマスターすれば、「オープンスタジオ（同）」が利用できる。版画室で参加者が自主的に作品を制作することができる貴重な機会だ。

「版画の制作は機材や薬品が必要なので、オープンスタジオの人気は高く、いつも

申し込みが殺到します。地元だけでなく、東京や千葉、埼玉からの利用者もたくさんいらっしゃいますね」

大切なのは、指導より心地よい場づくり

桜庭さんはこの版画室で講座の企画から機材や備品の管理やメンテナンス、それに制作の指導や相談などに携わる。

「ただ、指導するというより、場をつくることを第一に考えています。利用者はそれぞれ、いろんな目標や目的で参加しています。ですから、みんなが心地よい場づくりが必要。

それに、版画について私よりも詳しい利用者もいますから、指導だなんて、とてもども（笑）。常連同士が仲良く和気あいあいと接しているたり、機材の操作に慣れない参加者に手ほどきしたりする光景も珍しくない」と、桜庭さんは言う。

「こちらが利用者のお手伝いをするところか、むしろ助けていただいている」と、桜庭さんは、「でも」という接続詞を発した。そして、「発表ばかりが目標ではない」と言葉を継いだ。

「利用者の方とあれこれ相談しながら作業を進めますので、作品ができあがった時には一緒に喜べます。創作の喜びに立ち会えることが、何よりうれしい」

「プレス機を通じて刷り上がりが目

くる瞬間は、私もどきどきするほどなんですよ」

山崎 優さん

主席ワークショップ・コーディネーター（子どものアトリエ担当）

特集 横浜美術館を支える人々

やまさき ゆう 1989年の開館以来、「ワークショップ・コーディネーターとして「子どものアトリエ」の絵児から、12歳までの子どもたちを対象とした様々なプログラムを企画・指導。現在、教師や保育士など指導者への研修にも力を入れている。

主体性や自発性を重視する「子どものアトリエ」の活動



子どもが好きなように絵を描き遊べる場

横浜美術館には、市民のアトリエに加えて、「子どものアトリエ」も用意されている。小学6年生までの子どもたちを対象とした創造の場だ。その活動は多岐にわたるが、中でも最も親しまれているのが「親子のフリーゾーン」。「ねんど」「えのぐ」「かみ」の素材ごとの三つのコーナーがあり、子どもたちは絵を描いたり、工作できる。主席ワークショップ・コーディネーターの山崎優さんは言う。

「子どもたちに『こんな風にくりましょう』とは言いません。子どもたちが好きなコーナーで好きに手を動かし、受け身でなく自発的に楽しんでもらうことを重視しています。何かを教える前に、自分やりたい気持ちを育てる、子どもの主体性を育てるのがこのプログラムの特徴です。ただ、ひとつだけ子どもたちに求めるのは、片付けをきちんとすること。つまり楽しいことをした後は必要なこともできない」と

とりわけ賑わうのが、えのぐコーナーだ。中庭で子どもたちが走り回り、壁や窓ガラスなどに思う存分絵を描く。

「服が汚れないよう、雨がっぱや水着で遊ぶ子どもも多いんですよ」

素材は不变でも手法は時代に沿つて

こうした自由さが人気を呼び、利用者が一日に1000人を超えたこともあるほど。だが、混雑すると子どもたちが自由に遊べる空間が確保できないため、昨年6月からは600人（冬や雨天時など室内のみで実施する際は500人）の人數制限を設けるに至った。

また、かつてここで遊んでいた子どもが大人となり自分の子を連れてきたり、あるいは教員として児童を引率したりするケースも最近では増えた。

「本当に感慨深いですね。長く関わってきたと実感できます」

「変える必要を感じませんでしたから。ただ、素材は不变ですが、時代に沿って手法はアレンジしています」

「たとえば、以前はたらいに絵の具を入れて、手のひらで大胆な絵を描くケースが多かった。だが今は、コップに絵の具を混ぜて色の変化をじっくり楽しめませたりする」

「学校や家庭ではできない体験を通して、生活全般について関心を持つもらうことを目論んでいます。そのためには、自ら知り得た発見が大きい」

重視しているのは障がいのある子どもたち

子どものアトリエでは、日曜日や夏休みに開催する多様な造形プログラムや、鑑賞プログラムも展開する。

「鑑賞するにあたっても、自分から作品を見たい気持ちを育むよう心がけています。作品と向かい合い、受け止める力、これがしっかりとないと、どんなに説明しても意味がありませんから。それなのに、『この絵、いくら?』とか『いちばん高い絵はどれ?』と質問されると、けっかりしてしまいますね」

また小学校や保育園、幼稚園、養護学校などが学校単位で参加できるプログラムもある。山崎さんがとくに重視するのは、障がい者向けの美術教育だ。

「自分の力では動けない児童や生徒が、先生や看護士と一緒に造形に取り組みます。すると、いつもと違う体験に心が動く状態となります。心が動くこと、これは美術ではなく大切」

このように山崎さんは、どんなプログラムでも主体性や自発性に重きを置く。「この二つは幼児期にこそ育つと、長く続けてきて実感しています。子どもたちを見守り、太く、強く育てることをこれからも続けたいと思います」▼

来館者以外も対象にした、
ユニークな教育普及活動

説書の題點を解説

横浜美術館には、「エデュケーター」と呼ばれる職種がある。展覧会の鑑賞をより深めたり、創作が体験できたりするプログラムに携わる役割だ。坂本恭子さんは、主に鑑賞プログラムを担当。展覧会の内容に応じ、ギャラリートークをはじめとしたプランを考え、実行する。展覧会の企画を担当した学芸員自身が語る講話

路を見出したいと、心がけています」

また、坂本さんは一方的に語るのでではなく、参加者に感想や印象を語つてもらうよう努めている。

しながら館内を巡るといった内容である。「美術館に遠いと思われるがちな視覚障がいのある方にも、対話を通じて美術作品を体験できる機会を設けました。また、説明役の参加者も、これまで以上にしっかりと作品を見るようになり、どう言葉で表現するかも考えるので新たな発見をしてもらえて、(笑)

す。聞き手側のスタンスに立ち、別の視点から作品を解説することを心がけています。作品の見方はひとつではなく、さまざまな受け止め方があるわけですから」たとえば、コレクション展で鳥に注目したギャラリートークを実施したことがある。鳥を題材とした絵画や彫刻に的を絞つて、作品を巡るといった内容だ。「ユニークな切り口で、日常につながる回

大人や子どもも向けの他にも、横浜美術館では、障がいを持つ人や日本語が話せない人などを対象とした鑑賞プログラムにも取り組んでいる。たとえば、視覚障がい者向けの鑑賞ワークショップも実施され、人が見える人と見えない人がグループをつくって、どんな作品なのか言葉で説明

横浜信用金庫と連携して営まれている。
「美術館は、美術が好きな一部の限定された人たちだけの施設ではありません。もっと多くの人たちに美術を広げていきたい。そのためには、美術館に閉じこもっていてはダメです。美術館という枠を飛び越えることが必要なんです」(広報室談)▼



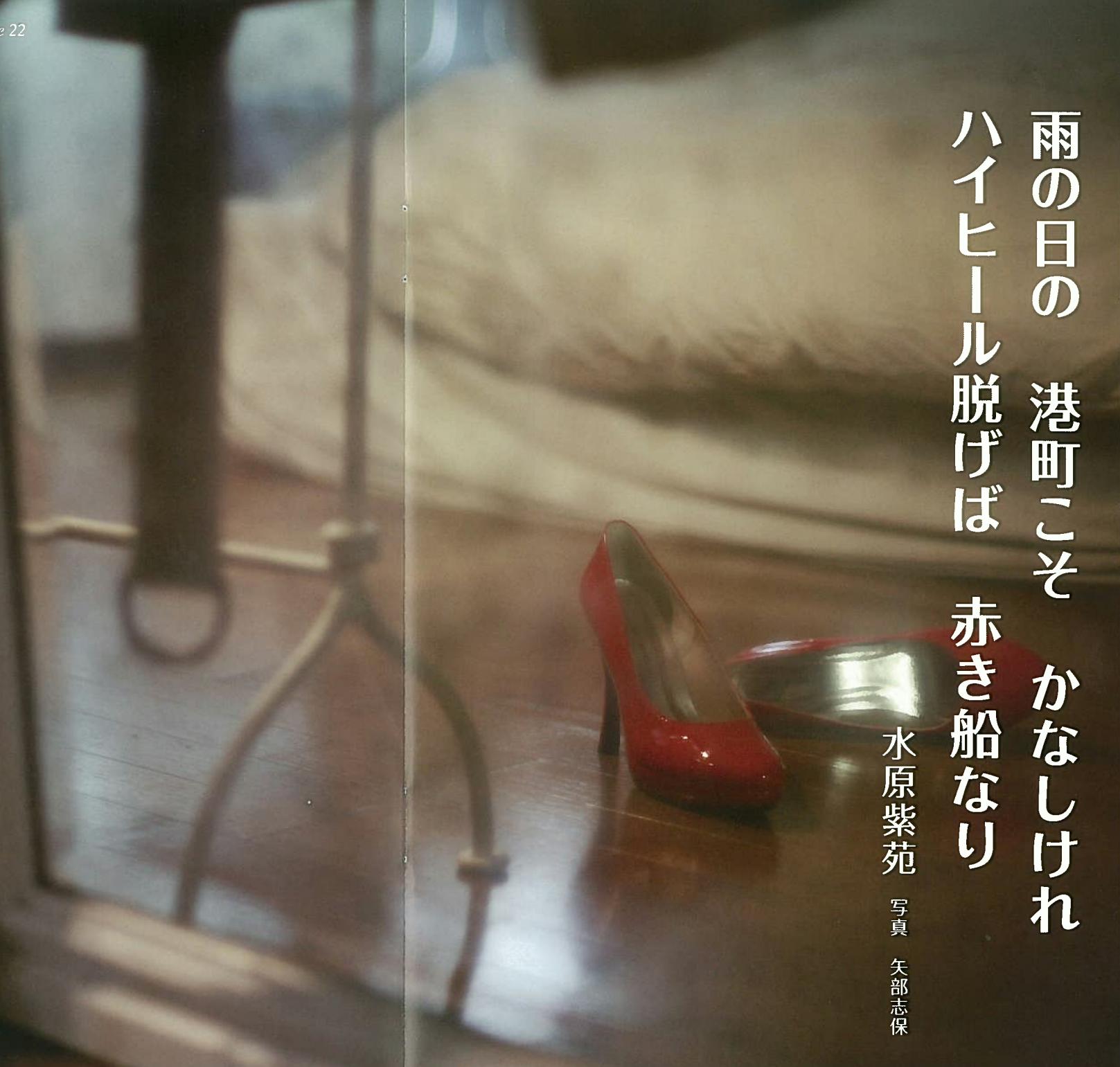
學芸員 教育普及担当

坂本恭子さん

展へ関わったのも、2011年より教育普及グループに移る。「コレクション展」でのギャラリーワークや、子ども対象の鑑賞ワークショップ、ボランティアアドバイザーの育成、ワークシートの制作など、各種の講演プログラムを企画・実施。

雨の日の 港町こそ かなしけれ ハイヒール脱げば 赤き船なり

水原紫苑 写真 矢部志保



女がハイヒールを脱ぐのは、いつたいどこだろう。恋人の部屋か、旅のホテルか、あるいは海の見える公園か。ハイヒールは、女から別れて船出したがっている。この赤は、海の青の中でこそ美しいのだと、知っている。ハイヒールを脱いだ女は、すべてを失うだろう。恋と、小さな赤い船と、雨の日の記憶を。もう何ひとつ、要らないのだもの。

みずはらしおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井市に師事し、以降歌集『あんか』『客人(まらうど)』『くわんおん(観音)』『いろせ』『あかるた』、著作『世阿弥の墓』『星の肉体』『京都つた物語』などを発表。現代歌入選会賞受賞、懸河梅花文学賞、河野蘭子賞など多数受賞。
やべ しほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年に渡り、日本語教師となる。帰国後、平地駿師事し、独立。渡辺貞夫によるショットシャンを多く撮影している。

そのため森村さんは情報収集で得たデータをもとに展覧会をつくりあげるのではなく、直感を重視する方針だ。

「白い大きなキャンバスを^ヲえられて、絵を描く感じに近いですね。何を描こうかある大きなアウトライン（輪郭）を考えて、下書きしてみて、試行錯誤しながら前に進めていきます」

いと、森村さんは意氣込む。「最近は多くの展覧会で、子ども向けの解説冊子を出していますが、前々から疑問に思うのは、あの解説文を誰が書いているのかわからないこと。記名じやないから、責任の所在が明らかにならない。そこで、生の言葉で伝えることを大

「構築美をつくつておいて、あえてひび割れを見せたり、穴を開けたりしたい。イギュラーなものを多く取り込み、複雑な面白さを出せねばと構想しています。またタイトルの話になりますけど、い

なお、本展は横浜美術館と新港ピアを中心を開催される。美術館では回遊式で出品作を展示し、構築美を見せる。一方、新港ピアでは会場を海に見立て、鑑賞者を漂流させたいと語る。

うして、いっか迷います。そこで手がかりを差し伸べて、扉の開け方を知つてもいいれば……。わからないものがわかることは、楽しいことですからね」

もりむら
同市在
専攻科
美術館
た私」
(2007
部科学
秋の紫

やすま
主。京都
修了。国
での個展は
(1996年
年)があ
大臣賞、
受褒章を受

1951年立芸術
内外での展
「美に至
、「美の
る。2007
1年に第
章。

年、大阪市生まれ。
学美術学部卒業。
展覧会多数。横浜
の病一女壇になつ
教室、静聽せよ」
年度芸術選奨文
52回毎日芸術賞、

森村泰昌さん

美術家、ヨコハマトリエンナーレ 2014
アーティスティック・ディレクター



ヨコハマトリエンナーレで
大切な忘れものを問い合わせる

Text by Shinkawa Takashi. Photo by Mori Satoshi.

街づくりがきっかけで、大道芸に出会う
イベント・プロデューサーの大久保文香さんは、「大道芸の母」と慕われている。だが、大久保さんが大道芸に深入りするようになったのは遅く、40歳をすぎてからのこと。専業主婦だった大久保さんは三人の子どもを育て、PTAの活動にも積極的に関わった。

「いろいろと人間関係を構築するうち、「関内の街づくりをしないか?」と声がかかりました。町内会や飲食店の組合などばらばらな組織をまとめ、関内の地位向上を図ろうと、1985(昭和60)年に、横浜スタジアムの社長だった鶴岡博さんを中心に『関内を愛する会』が始まりて、その事務局長をお引き受けしたのですよ。そして、お祭りやバザーを行なううち、イベントを開催する面白さに引き込まれました」

ほぼ同時期、野毛でも街づくりの動きがあり、街の活性化を目論んだイベント「野毛大道芸」がスタートした。ここで、大久保さんは大道芸を目の当たりにする。毎年、見に行くうち、最初は客の一人にすぎなかつたが、92(平成4)年から、関内を離れて野毛大道芸実行委員会のスタッフとなつた。

街づくりがきっかけで、大道芸に出会う

ジャグリング!!西洋風複雑お手玉?

1866(慶應2)年、浪五郎は正規の旅券を手に横浜港から歐米巡業に旅立つた。

国内外を巡り大道芸人を発掘し続けた

そこで大久保さんは、イベントづくりは事情が違つたと大久保さんは振り返る。「なにしろ、大道芸人自身がそもそもいない。ですから、寄席芸人や暗黒舞踏、お母さんコーラス、バナナの叩き売りなどが出演し、そこにプラスして海外からのパントマイムやジャグリングが芸を見せるくらい。そつそう、ジャグリングという言葉も知られてなかつたので、『西洋風複雑お手玉』なんて呼ばれていきましたね」

一部署は人事課でした。考へてみればこ

の時、人と人をつなぐ仕事は面白くて大切なんだと知りましたね」

また、海外のみならず、日本各地にも

大久保さんは足を運んだ。若い新しい芸人と出会うためだ。

「大道芸は生の芸ですから、直に見ない

つきあいが続く人たちがたくさんいる。

「港町・横浜ですから、国際的な大道芸

祭にしたいと考えました。また、後から

知つたのですが、日本のバスボート第1号

は、軽業師が取つたそうで、横浜は芸に

も縁があると知りました」

その軽業師は、隅田川浪五郎という

ですよ」▼

大久保文香さん

プロデューサー



おおくぼ ふみか 1940年、東京都生まれ。44年から横浜・本牧に家族で移り、同じ敷地内には山本周五郎一家が住んでいた時期も。現在も本牧在住。娘の砂智子さんが代表取締役を務める桜蘭株式会社でパフォーマーやアーティストの派遣に取り組む。<http://o-lang.com/>

大道芸を知つて気づいた、プロデュースする面白さ

環境問題と実験ショード、そして大道芸の三位一体

らんま先生

eco 実験パフォーマー



驚きと笑い声に包まれエコを語るショード

らんま先生の肩書きは、eco 実験パフォーマー。耳慣れない言葉だが、それもそのはず、日本で、いや世界でこの肩書きを名乗るのは、らんま先生ただ一人だからだ。取材の日に見たショーでは、ジャグリングやマジックを織り交ぜながら、数々の道具を駆使して、子どもたちと一緒に不思議な科学実験を展開。驚きの声と笑い声に包まれる中、さりげなく環境問題についても語った。

「環境問題だけを語つても、誰も見向きもしませんから。エコロジーの講座に行くと、多くの人が寝ているケースもよく目ににするほど。そこで、エコと大道芸を結びつけることで、少しでも環境に関心を持つてもらえれば。ぼくの芸は、33%がエコロジー、33%が実験ショード、33%がジャグリングやマジックです。そして残り1%は思いですね」

環境問題と実験パフォーマンス、そして大道芸。この他に例を見ない三位一体を、らんま先生は実践している。

「おかげさまで、年に約200回日本各地をショードをして巡ります。これまで招かれたのは、46都道府県。なぜか、長崎県だけ縁がなくて」

教員を務めながら、大道芸の練習に励む

若い頃、らんま先生はインドネシアを旅して、積極的にボランティア活動に取り組んだ。植林活動や農業の手伝いに終わり、エコロジーの大切さを身にしみて実感した。そして帰国後、福祉関係の教員の道を選んだ。

「父は理科教師、母は幼稚園教諭なので、子どもの頃から先生になるのが当たり前だと思って育ちました」

日々、教壇に立ちつつも、らんま先生は趣味で大道芸を始めた。忙しい時間を使つて、ジャグリングやマジックの練習に励み、着実に腕前が上達。その成果はジャグリングのコンテストでの優勝に実を結んだ。

その一方、環境問題の大切さを世間に広めていく活動に関わりたいという思いも頭から離れない。

そんな折り、エコロジーと芸を結びつけるアイデアがふと浮かんだ。そして、eco 実験パフォーマンスを追求するため、10年間務めた教員を辞めた。

「先生という設定を思ついた時、なん

で今まで気づかなかつたんだろうと思いましたよ。父が理科の先生なのだから、実験を見せねばいいんだって」

でも、当然、簡単に食つていけるわけはありません。初めの頃は、皿洗いのアルバイトをしながら活動していましたね」

パフォーマンスの力で環境問題に関心を親しみやすいショードはやがて評判となり、次々と出演依頼が舞い込むようになった。また、テレビ東京系列の子ども番組「学びなサイエンス」ではレギュラーとして出演するなど、活動の場も広がった。でも、基本スタンスは変わらない。「実験では驚きを見せたい。驚きを見せながら、少し説明を加えると、みんな納得する。パフォーマンスの力で引きつけないと、かんじんなエコに興味を持つてもらえないんですよ」

各地を訪れると、ノリがいい土地もあるれば、人みしりする人が多い地域もある。とらんま先生は言う。「ショードを始める前、お客様との距離感を縮めるために、いろいろと芸を見せてたりトークをしたりするんですよ。大道芸で身につけたテクニックがちゃんと役に立っています」

生まれた青葉区でいまも暮らす。「横浜でショードをすると、地元なので知りますね」



お知らせ

シルク博物館～春の企画展～

「世界に羽ばたいたスカーフたち」

昭和30年ごろに横浜から輸出されたスカーフなどを展示紹介

会期：平成26年4月26日(土)～6月22日(日)

(月曜日休館、但し5月5日開館、5月7日休館)

午前9時～午後4時30分まで(入館は4時まで)

入館料：一般／500円 65歳以上／300円

高・大学生／200円 小・中学生／100円

URL：<http://www.silkmuseum.or.jp>

横浜ルネサンス No.22

2014年5月30日発行

発行 横浜信用金庫
〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1
Tel:045-680-6912
Fax:045-651-2303
<http://www.yokoshin.co.jp>

編集 / 制作 横浜信用金庫総合企画部
(横浜ジェリービーンズ倶楽部)
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp

「ビューティフル・ヨコハマ」は1970年11月に発売された平山三紀(現・平山みき)のデビュー曲である。

作詞・作曲は橋本淳と筒美京平で、いしだあゆみの「ブルー・ライト・ヨコハマ」(1968年)と同じである。

三島由紀夫事件があつた)。

平山は筒美京平の「秘戻つ子的存在」とよく言われた。実際、「日本のパート・バラツク」と呼ばれる筒美は、橋本淳とともに多くの作品を彼女に提供している。ただこの「ビューティフル・ヨコハマ」は筆者には少しもたれる感じがある。ポップスとしてはやや重いのである。出世作となつた「真夏の出来事」(1971年)や「フレンズ」(1972年)のほうが彼女の歌唱の重みと曲の軽妙のバランスが良いと思う。

ギター、ベース、ドラム、キーボードというオノドックスな編成のバンドをバックに「真夏の出来事を歌う当時の彼女をYouTubeで見た。トレーデマークの黄色い衣装で振り付けもなく歌う平山には「ディーヴァ」(diva・歌姫)といった存在感があつた(10代の少女アイドル歌手が躍るような振り付けで歌うようになるのは1970年代後半からである)。

How To Taste Musics In Yokohama.

横浜の聴き方

第14回

「ビューティフル・ヨコハマ」 「真夜中のエンジェルベイビー」

平山三紀

平山三紀の魅力はいわゆる美声ではなく、鼻にかかるハスキーボイスにあることは間違いないだろう。デビュー当時の彼女のボーカルがまだうつくしかったと思う。この連載の第12回で沢田研二には「都会的な感性があふれていた」と述べたが、それは沢田が「危険なものたり」(1973年)でソロ歌手としてブレイクした後のことだ。1970年当時、彼女のようないなかつたと思う(非都会的なボップセンス)って何だという疑問もあるが……)。

1970年のオリコンのヒット曲ランキンング(50位)を見ると、1位が「黒ネコのタンゴ」(皆川おさむ)で、2位が「ドリフのズンドコ節」(ザ・ドリフトーズ)である。この年は前年に「新宿の女」でデビューした藤圭子の全盛期で、「圭子の夢は夜ひらく」の他に3曲がランキンインしている(五木寛之がエッセイ集『ゴキブリの歌』の中で彼女の歌を絶賛していたことを覚えている)。その他、青江三奈が2曲、森進一が3曲ランキンして、3人ともハスキーボイスだが、平山とは真逆なタイプである(しかし、この1位、2位を見ると1970年はスゴい年だったと思ふ。ちなみにこの年の3月には日本航空機より号ハイジャック事件、4月にピートルズが解散、11月には

「真夜中のエンジェルベイビー」(1975年)は、「ヨコスカ ヨコハマ ハラジユク ロッポンギ……」という歌詞で始まる。後に平山のアルバム「鬼ヶ島(1982年)」をプロデュースする近田春夫が、この曲を自らのバンド・ハルヲフオンのアルバム「電撃的東京」(1978年)でカバーしている。このカバーバージョンを聴くと、平山三紀のセンスがロックンロールに連なっていることがわかる。「横浜の聴き方」として取り上げるなら、この曲のほうがふさわしいと思う。(中島公)



横浜信用金庫創立周年記念「クリスマスコンサート」

横浜ジェリービーンズコンサート サートーン・キヤンドル カフェ

横浜観光プロモーションフォーラム

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。



2013年12月23日(月・祝)に横浜美術館グランドギャラリーで、新進気鋭の指揮者・作曲家である相澤直人氏の下で

活動する「あい、混声合唱団」によるクリスマスコンサートを開催しました。大きなツリーが飾られた会場で、「We wish you a Merry Christmas」などマスムードに包まれました。

2013年12月23日(月・祝)に横浜美術館グランドギャラリーで、新進気鋭の指揮者・作曲家である相澤直人氏の下で

横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業を展開しています。同倶楽部は「横浜の価値を高める各種の活動」を行うことを目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介します。

横浜ジェリービーンズコンサート サートーン・キヤンドル カフェ

横浜ワールドポーターズ前広場でN.U.the tote、ナデシコ、ジョンファ、TIA出演によるコンサートを開催しました。キャンドルの灯とみなとみらいの夜景が輝く会場で各2組のアーティストがステージを披露し、クリスマスの夜を盛り上げました。

華氏451の世界
おもしろい中の界
るあはれの味



横浜発、現代アートの国際展。

ヨコハマ

前売券発売中!!
7月31日[木]までの限定販売

トリエンナーレ 2014

[前売連携セット券(ヨコハマトリエンナーレ2014、BankART Life IV、黄金町バザール2014)]

一般 2,000円／大学・専門 1,500円／高校生 1,100円

(当日券 2,400円)

(当日券 1,800円)

(当日券 1,400円)

[前売単体券(ヨコハマトリエンナーレ2014)]

一般 1,400円／大学・専門 900円／高校生 500円

(当日券 1,800円)

(当日券 1,200円)

(当日券 800円)

[チケット販売窓口] 鉄道駅売店、各種プレイガイド等で販売

※8月1日からは当日券を販売

[お問い合わせ] ハローダイヤル 03-5777-8600 / 050-5541-8600 (8:00 - 22:00)

www.yokohamatriennale.jp

ヨコハマトリエンナーレ2014「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」

[会期] 2014年8月1日(金) - 11月3日(月・祝) / 第1・3木曜日休場

[主会場] 横浜美術館、新港ピア(新港ふ頭展示施設)

[開場時間] 10:00 - 18:00 ※入場は閉場の30分前まで

[月1回土曜日(8/9, 9/13, 10/11, 11/1)は20:00まで開場]